

耕畜連携による飼料用トウモロコシの栽培支援

■ 中讃地区耕畜連携推進協議会 ■

(中讃農業改良普及センター 高八 弘、川西 勲、○大西 保)

●対象の概要

中讃管内の畜産農家は、担い手の高齢化や混住化が進み、飼養戸数は減少しているが、所得向上を図るために規模拡大に取り組んだり、一貫経営や和牛繁殖経営に転換を志向する農家も少なくない。

耕種農家においては、農業従事者の高齢化等による担い手の減少や耕作放棄地が増える中、地域農業を維持し農地を保全していくための集落営農の組織化が進み、集落営農法人が増加している。また、野菜を主体とした新規就農者も増えている。

●課題を取り上げた理由

高品質な畜産物を生産するため、畜産農家は安全・安心で品質の良い粗飼料を求めるとともに、高騰している飼料費の低減を図る観点から、地域における稲わら等の粗飼料は貴重な資源と言える。

一方、集落営農法人においては、夏場の水事情の悪いほ場の有効活用を模索していた。そこで普及センターでは飼料作物による耕畜連携を推進し、スーダングラスの生産を通じた畜産農家とのマッチングを図ってきた。

また、自給粗飼料（飼料用トウモロコシ）を通年給与したいと希望する酪農家がある一方、野菜主体の耕種農家等から農地の有効利用を図り、野菜以外での収入確保に取り組みたいとの問い合わせもあった。

そこで、新たに飼料用トウモロコシを核とした耕畜連携を推進していくため、畜産農家と耕種農家との結びつきを強化し、互いに協力するためのシステム構築を行うこととした。

●普及活動の経過

令和元年に飼料用トウモロコシサイレージの増産を考えているまんのう町の酪農家と耕種農家(1戸)が連携して試験的に栽培(30a)し、手応えを感じたことから、令和2年度は作付面

積の拡大と栽培者を増やして本格的に取り組みを開始することになった。

そこで、仲間に声掛けを行い、まんのう町、善通寺市及び綾川町の耕種農家3名が飼料用トウモロコシを栽培することとなり、連携強化や情報共有とともに、今後希望する農家が参加しやすいようにと協議会の立ち上げを提案した結果、中讃地区耕畜連携推進協議会を立ち上げて取り組んでいくこととなった。

また、この協議会で検討した結果、畜産農家の労力軽減や作付面積の拡大に対応していくため、飼料用トウモロコシの刈取り、サイレージ調製については、岡山県のコントラクター組織に依頼することとし、栽培ほ場の現地確認や栽培方法、播種等の作業分担については現地検討会を開催し、その場で普及センターから飼料用トウモロコシの栽培方法について説明を行った。加えて、①播種作業については播種機を保有する畜産農家が行う、②除草剤散布等の一般栽培管理作業は耕種農家が行う、③栽培(播種作業、堆肥散布)やコントラクターに委託する収穫作業に係る作業料は耕種農家が負担し、サイレージ調製されたロールバールを畜産農家が買い取るなど具体的な取り組み内容についても詳細に検討し、参加する畜産及び耕種農家お互いが納得して取り組むよう支援を行った。その結果、作付面積は綾川町と善通寺市で約2.1haで栽培することになった。

作業は、5月下旬に播種し除草剤の散布を6月中旬に行い、収穫は9月上旬に行った。

特に、このような取り組みは中讃地域では初めてであったことから、普及センターでは耕種農家の飼料用トウモロコシ栽培については播種前から定期的にはほ場の状態や生育状況を確認しアドバイスを行うとともに、畜産農家へは随時情報提供を行うなど、円滑に取り組みが進むよう支援を行った。また、2月には本年度の取組結果や課題の抽出、次年度の作付予定等の検討会を開催し、さらにコントラクター組織を交えた意見交換会を開催した。



飼料用トウモロコシの播種作業



除草剤の散布作業



収穫作業

●普及活動の成果

今年度の取組みでは栽培自体に問題はなかったが、長大作物であるため、綾川町のほ場では堆肥の投入が間に合わなかったことや数年間遊休地であったため、地力不足が原因で草丈

が低く収量が予想より少なかった。また、善通寺市のほ場については、収量的には予想どおりであったが、小区画のほ場が多く、ほ場への進入路が狭い箇所があり、収穫機械が大型であるため、ほ場への出入りに苦勞したほか収穫できないほ場が一部に見られるなど、各作業ごとに様々な課題の抽出ができた。

なお、来年度は今年度の活動に興味を示したまんのう町の耕種農家が、新たに協議会に加入し、栽培を開始する予定となった。

表一 構成員のトウモロコシ収穫実績

氏名	収穫面積 (a)	ロール数 (個)	反収(個)
A(善通寺市)	95.76	69	7.2
B(綾川町)	50.0	28	5.6
C(まんのう町)	32.56	23	7.1
合計	178.32	120	6.7

●今後の普及活動の課題

耕種農家が飼料用トウモロコシの栽培に取り組むにあたっては、栽培ほ場の隣接地の栽培作物によって播種や収穫のタイミング、除草剤の散布によるドリフト問題など多くの制約が出てくるため、隣接地の栽培者とのコミュニケーションやリサーチが重要である。

栽培方法に関しても、収穫する機械が大型であったり、耕種農家にとっては馴染みのない作目であることから、こまめな栽培指導を行っていく必要がある。

また、収穫作業を県外のコントラクターに委託しているため、一定以上の作付面積が必要で、作付面積の調整や場合によっては県内の別の作業委託農家との連携も図っていく必要がある。

このような課題を確実に解決し、畜産農家と耕種農家がうまく連携し飼料用トウモロコシの栽培と安定供給ができるシステムの強化を図り、耕畜連携を推進する。